

守れるか、台湾の民主主義

むなかた
宗像

たかゆき
隆幸

● 本会理事
台湾独立建国聯盟中央委員



一九五九年の暮れ、台湾人留学生の許世楷さん（前台湾駐日代表）が私の居た学生下宿に入居したので友人になった。翌年、台湾人留学生が台湾青年社（現台湾独立建国聯盟日本本部）を結成、王育徳先生を発行人として日文の『台湾青年』を発行、一九六一年にこの月刊誌の編集を頼まれて、私は彼等の仲間になった。

一九六四年六月、仲間の一人、陳純真が国民党特務である事がわかり、黄昭堂委員長以下七人で彼を査問したことで我々は逮捕され、監禁強要罪の判決を受けたが、執行猶予がついた。

一九六七年八月、一度は台湾を見ておきたいと思った私は、「僕が台湾で逮捕されたら、独立運動の宣伝に利用してくれ」と仲間と言って台湾観光旅行団に加わった。台湾を一周して

る途中から特務に尾行されたが、彼等は私を逮捕しなかった。帰国すると、仲間の二人が強制退去令によって法務省入国管理局に収容され、世論の厳しい批判が起きていた。国民党は私を逮捕して批判がさらに高まるのを恐れたのであろう。東京地裁が強制送還の執行停止を命じたので、二人は釈放された。

翌年三月、仲間の柳文卿が夕方、入管に収容され翌朝の一番機で台湾に強制送還された。裁判所が柳の強制送還執行停止命令を出すまでの数時間、彼の送還を阻止しようと考えて、我々は十人で羽田空港に飛び込んだが、滑走路近くで逮捕されて目的を達せなかった。

彭明敏・台湾大学教授（一九九六年の台湾国民の直接投票による第一回総統選挙での民進党

公認候補）は、一九六四年九月に二人の弟子と「台湾自救宣言」を執筆、印刷配布しようとして叛乱罪で八年の懲役刑になったが、彭教授は国際法学会の著名人だったので国際的な批判が強く、蒋介石総統は翌年十一月に彼を特赦で釈放した。彭先生は特務機関の厳しい監視下に置かれていたが、私は一九六八年から秘密ルートで先生と文通していた。

一九六九年二月、彭先生から、再投獄されるか暗殺される恐れがあるので、台湾から脱出する方法はないだろうかとの相談を受けた。私が考えた方法は、友人を台湾へ送り、彼のパスポートの写真を彭先生の写真とすり替えることだった。

当時のパスポートは写真を張つてあるだけだったから、写真の張り替えは簡単であつたが、問題は写真に押してある割印である。私は割印を作る練習を重ね、ヒッピースタイルの彭明敏先生の顔写真（それを拡大した写真が台北市の二・二八記念館に展示されている）に割印を押し、それを持たせて友人の阿部賢一を台湾に送

った。一九七〇年一月三日、彭先生は阿部のパスポートで台湾脱出に成功した。

一九九一年、当時は米国にあった台湾独立建国聯盟総本部の張燦基ちやうさんこう主席から、聯盟幹部が台湾に密入国して民主化のために獄中闘争を行う計画だが、日本人のパスポートを利用できないかと頼まれた。かつては外国政府と取引してまで独立運動家を強制送還させていたのに、この頃の国民党は独立運動家の影響を恐れて帰国を禁止していたのである。日本から台湾へ行くのであれば、パスポートの取得に必要な書類に張主席らの写真を添えて申し込めば良いので、簡単であつた。この方法で張主席ら四人が台湾へ帰国できた。その後、台湾人の李登輝総統の下で台湾の民主化は急速に進んだ。

しかし、昨年総統になった香港生まれの馬英九ばえいは、中国との「統一」政策と台湾の民主主義の破壊を推進している。「統一」を阻止し、民主主義を守って二〇一二年に民主的で公平な総統選挙を行えるかどうか、台湾の命運を決定することになる。